

聖徒が世界をさばく

コリント人への手紙第一 6章 1-11節

はじめに

私たちイエス様を信じる人には、神様からどんな祝福を与えられるのでしょうか？

イエス様は、私たちのために十字架に架かり復活されました。今日の聖書箇所には、そのイエス様を私たちが信じる時、五つの祝福を与えられると教えています。

1. イエス様を信じる人の祝福

(1) 罪が洗われる

私たちがイエス様を信じる時、私たちのすべての罪が洗われます。私たちのどんな罪も、イエス様が流してくださった血によって洗われるのです。

神様はこう言われました。「**たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる**」(イザヤ 1:18)。

洗礼は、私たちの罪が洗われたことを表すものです。洗礼で用いられる水は、イエス様の血を表します。私たちは、洗礼を受けることによって、イエス様の血によって私たちのすべての罪が洗われたことを覚えることができるのです。

(2) 義と認められる

第二に、私たちがイエス様を信じる時、私たちは神様に義と認められます。義と認められるとは、神様の前に完全に罪を償い、神様に完全に従った者と見なされるということです。それは、罪が赦されるということでもあります。

イエス様が十字架において、私たちの代わりに罪を完全に償い、その生涯において、私たちの代わりに神様に完全に従ってくださったことにより、私たちは神様に義と認められるのです。

(3) 聖なる者とされる

第三に、私たちがイエス様を信じる時、私たちは聖なる者とされます。聖なる者とは、罪のない者とされるわけではありません。そうではなく、この世から取り分けられる、聖別されるということです。この世のものから、神様のものとされるということです。

イエス様を信じて聖なる者とされた人は、「聖徒」と呼ばれます。私たちは、イエス様を信じてもお罪の性質が残っています。しかし、それでも聖なる者、聖徒と呼ばれるのは、

私たちが神様のものとされているからです。

(4)神の国を相続する

第四に、私たちがイエス様を信じる時、私たちは神の国を相続します。イエス様を信じると人は、聖霊によって新しく神様の子どもとして生まれ変わります。神様の子どもとされた人は、神様から相続財産を受け取ることができるようになります。その相続財産が、「神の国」です。

神の国とは、イエス様を王となって神様が支配されるものです。その神の国は、二千年前にイエス様がこの地上に来られた時に、この地上にもたらされました。そして今は、私たちクリスチャンと教会を通して、この地上で神の国は少しずつ広がっています。そしてやがて、イエス様が再び来られる世の終わりに、この神の国は完成するのです。私たちはその時、イエス様を負うとする神様の完全な支配の中で、祝福に与るのです。

(5)世界と御使いをさばく

第五に、私たちがイエス様を信じる時、私たちはこの世界と御使いをさばくようになります。イエス様が再び来られる世の終わりの時に、イエス様はこの世界と御使いを裁かれます。これがいわゆる「最後の審判」です。

この最後の審判の時、私たちイエス様を信じる者は、イエス様と共に、この世界と御使いを裁くのです。なぜイエス様を信じる私たちは、イエス様と共に、この世界と御使いを裁くのでしょうか？それは、イエス様を信じる私たちは、イエス様と一つに結ばれ、キリストのからだの一部とされるからです。

かしらであるイエス様が、この世界と御使いを裁く時、そのからだである私たちも共に、この世界と御使いを裁くのです。私たちは、イエス様に裁かれて、永遠の滅びに捨てられても仕方のない者であるにも拘らず、イエス様と共にこの世界と御使いを裁くという祝福に与るのです。

2. イエス様を信じる教会のあり方

今日の聖書箇所は、私たちがイエス様を信じる時に、以上のような祝福に与ることができると教えています。しかし、そうであっても、私たちの人生には様々な問題が起こります。教会にも様々な問題が起こります。イエス様を信じて祝福に与ったからといって、私たちの人生も教会も、順風満帆というわけではありません。

コリント教会にも、様々な問題がありました。教会の中に性的な罪がありました。しかも、教会外の未信者の中にも見られないほどの罪でした。それにも拘らず、コリント教会は、その罪を見て見ぬふりをして、戒規を執行することもなく、野放しにしていたのです。

それだけではありません。コリント教会には、教会員同士が小さな事で争い、この世の裁判まで起こしていたのです。

パウロは、教会員同士の小さな問題は、この世の裁判で解決するのではなく、教会で解決すべきだと教えます。もちろん教会員同士であっても、大きな問題が起こった場合には、この世の裁判を起こさざる得ない場合もあるかもしれません。しかしコリント教会の場合は、小さな揉め事でさえ、この世の裁判を起こして、教会の中のクリスチャンにではなく、教会の外の未信者に解決を求めたのです。

このことは、コリント教会には、教会員同士の争いを仲裁することのできる賢い人が、一人もいなかったということの意味しています。教会員同士の揉め事を解決する知恵のある人が、コリント教会にはいなかったのです。夫婦の問題、親子の問題、お金の問題、人間関係の問題を仲裁に入って、聖書的に、信仰的に指導し、解決していく力のある人がいなかったのです。だからこそ、コリント教会の教会員は、教会の外の未信者に解決を求めていったのです。

私たちは、教会員同士で起きた問題を、教会の中で解決していく力を身に付けていかなければなりません。牧師や長老などの牧会者は特に、そのような知恵を身に付け、問題を聖書的、信仰的に解決していく力を身に付けていかなければなりません。

教会の中で起きた問題を、教会の外の未信者に相談し、解決を求めていくことは、教会にとって恥ずかしいことであり、教会にはその問題を解決する力がないと見なされているということを、教会は恥じるべきです。

しかし、教会員同士の争いを解決していく力は、牧師や長老だけでなく、信徒ひとりひとりが身に付けていくべきことです。なぜなら、私たちは、イエス様が再び来られる世の終わりの時に、神の国を相続し、イエス様と共にこの世界と御使いを裁くようになるからです。

教会は、やがて完成する神の国の出張所だと言われます。教会は、やがて完成する神の国を、この地上で現わし、神の国を人々に証ししなければなりません。教会は、神の国の前味を味わえるところです。神の国を味見できるところです。

やがて神の国が完成する時、私たちはイエス様と共にこの世界と御使いを裁くようになるのだとしたら、私たちはこの地上の教会で、しっかりと教会員同士の争いを仲裁し、問題解決をしていく知恵を身に付けなければなりません。そうして、やがて完成する神の国で、この世界と御使いを裁く姿を証ししていかなければなりません。そのような中で、人々は、教会にこそ神の国がある、教会にこそイエス様が共におられるということを知るので

3. イエス様を信じるクリスチャンの生き方

パウロは、教会が、教会員同士の争いを解決できないことを問題としていますが、それと同時に、そもそも教会員同士が訴え合うこと自体が問題だと言っています。

互いに争い、訴え合うことは、相手に負けないように、だまされないようにすることです。それは、相手を信頼せず、自分を守ろうとする姿勢です。相手が自分に対して悪意を持っていると思ひ込み、過敏に反応することです。

パウロは、そのような生き方は「敗北」だと言っています。そのような、相手から自分を守るために必死に戦う生き方は、むしろ相手に負けていると言うのです。

クリスチャンの生き方は、むしろ7節にあるように、不正を甘んじて受ける生き方、だまされていく生き方なのだというのです。そういう生き方こそ、本当の意味で相手に勝つ生き方なのだというのです。このような生き方は、あまりにもお人好し過ぎるように思えます。

しかしイエス様は、このように言われました。『**目には目で、歯には歯で**』と言われたのを、**あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。あなたを告訴して下着を取ろうとする者には、上着もやりなさい。あなたに一ミリオン行けと強いるような者とは、いっしょに二ミリオン行きなさい。求める者には与え、借りようとする者は断らないようにしなさい**」(マタイ 5: 38-42)。

必要以上に自分の権利を守るために必死になり、相手を攻撃する生き方は、相手に負けており、自分の権利を喜んで相手に与えることができる生き方のほうが、本当の意味で相手に勝っているのです。自分の権利を喜んで与えて生きる生き方こそ、私たちクリスチャンの生き方なのです。

おわりに

私たちクリスチャンは、イエス様を信じて洗礼を受け、すべての罪が洗われ、すべての罪が赦され、神様に義と認められました。そうして私たちは、神様の子どもとして新しく生まれ変わり、神の国を相続する者とされました。そして、キリストのからだの一部とされ、聖なる者とされ、やがてこの世界と御使いを裁く者とされました。

私たちはこの地上で、やがて完成する神の国を現わしていかなければなりません。

そのために、私たちは、教会員同士の問題や争いをしっかり裁き、解決する知恵を身に付けなければなりません。神の国を相続できない教会の外の未信者に、教会員同士の問題や争いの解決を求めることは、教会に問題を解決する力がないことを示しており、神の国を相続する聖なる者として、教会として、恥ずかしいことであることを覚えなければなりません。

そして私たちは、自分の権利を守るために必死になり、相手を攻撃して生きる生き方は、クリスチャンとして相手に負けている生き方であること、むしろ喜んで権利を手放し、相

手に与えることができる生き方こそ、クリスチャンとして勝利する生き方であることを覚えなければなりません。

このような教会のあり方とクリスチャンとしての生き方をいていく時、人々は、教会にこそ神の国があることを知るのです。